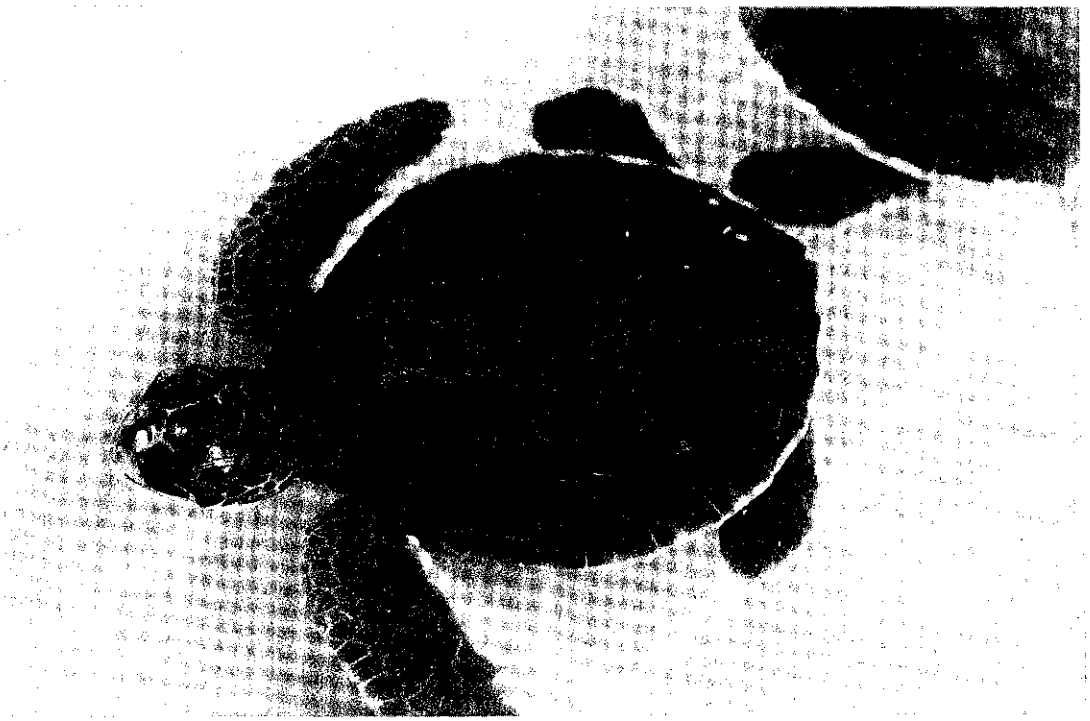
ISSN 1341-6928

串本海中公園
マリンパビリオン

1999. 2. Vol. 28, No. 2



アオウミガメ

Chelonia mydas (Linnaeus)

世界中の熱帯・亜熱帯海域に分布する種で、直甲長で50cm前後の未成熟個体は紀伊半島や伊豆半島でも周年みられる。我が国での繁殖は鹿児島県の屋久島以南の島嶼で行なわれ、小笠原諸島が本種の繁殖地としてよく知られる。小笠原諸島での産卵ピークは6月下旬～7月上旬。シーズン中に1頭が平均で4.1回の産卵を行ない、1回に約100個の卵を産む。孵化幼体は直甲長が約4cm、体重は約25g。成熟した大型個体では直甲長が約1m、体重は200kgを超えることがある。食性は成長課程の途中で雑食性から藻類（草）食へ変わる。幼体の体色は腹甲が乳白色、背甲は黒褐色で白い縁どりがある。背甲の鱗は成長とともに複雑な斑紋が現れ、特に日の出のような旭日模様をもつ未成熟個体は、『アサヒガメ』の地方名で呼ばれることがある。本種は口部が鋸歯のようにギザギザ状になっていることで他のウミガメと容易に区別することができる。写真は、1998年8月に生まれた屋久島産の幼体。ウミガメ科。 I.M.

串本海中公園センター

錆浦地先で見られる アオブダイ属魚類について　(2)

小寺 昌彦

前回に引き続きアオブダイ属の紹介をする。今回は1998年に海中展望塔からよく観察された種について述べたい。

ナガブダイ　*Scarus rubroviolaceus*

本種は海中展望塔からの観察では全長6cmほどから20cmを越えるものまで、数は少ないながら年間を通して出現率の高い種である。鼻先がやや盛り上がり、体全体が名前の通り長細い独特の形で、色彩変異に富む。体色は赤茶色一色のもの、赤茶色の体後半部に3～4対の白斑があるもの、後半部の鰭にいくつかの黒斑があるもの、赤茶色の体が白くカビの生えたように汚れたもの、そしてこれらの形質が混在するものだが、いずれも鱗が暗色で縁取られる特徴がある。さらに飼育中の7cmほどの個体では赤茶色と淡褐色または緑褐色と淡褐色の縦縞、胸鰭を通る太い横縞が現れるど、色彩が一定でない。

本種は他のブダイ類やベラ類と群れることは少なく、他のアオブダイ類と異なり海底から離れて泳ぎ回る姿がよく見られる。私の海中展望塔からの観察では、1995年夏以来20cmほどの本種が普通に現れており（それ以前は普通のブダイと区別できていない）、アオブダイやヒブダイと同じように以前から越冬していると思われる。なお海中展望塔では水温が15℃ほどに低下した今年の2月上旬にも20cmほどの個体が普通に出現している。10cm以下の小型個体は水深5mほどのサンゴ群落域でよく見られるが、20cmほどの大型個体は今のところ海中展望塔周辺以外では観察されていない。



図 1.ナガブダイの幼魚

ニシキブダイ　*Scarus prasiognathos*

海中展望塔から見られるのは全長10cm以下の幼魚が多く、橙から赤茶色の体に黒い縞状の斑紋があり、尾柄が白く、尾鰭は橙色をしている。また、背鰭、腹鰭、臀鰭に白黒の縞模様がある。本種はアミメブダイ、イトヒキブダイと色彩が類似し、日本産魚類大図鑑（1984、益田他）でもニシキブダイの幼魚をアミメブダイとして紹介している（瀬能,1993で指摘）。そのために本誌連載の「海中展望塔に集まる魚」でも1992年より本種をアミメブダイとして記録してきたが、これはニシキブダイとして間違いないと思われる。

本種は橙色をした尾鰭で前述の2種と区別でき、飼育下でもその形質は変わらない。なおアミメブダイ（体の後半部が鮮やかな水色）は幼魚が地先で潜水観察されているが採集できていない（福田によって写真撮影されている）。またイトヒキブダイ（尾鰭が透明、吻背面が橙色）も過去にそれらしいものを観察しているが、標本も写真も得られていないので、生息の確認はできていない。

さて、ニシキブダイは1998年に海中展望塔で1、2月と8～12月に出現し、年間を通しての出現率は約20%であった。また秋には20cmほどに成長した個体（体は小豆色で後半部に少数の白点が散在、尾柄と尾鰭は淡色）も何度も観察されている。本種は水深5mほどの浅いサンゴ群落域で幼魚が普通に見られるが、常に単独で他のブダイ類やベラ類とも群れず、近くを泳ぐブダイ類とは別行動をとっている。



図 2.ニシキブダイの幼魚

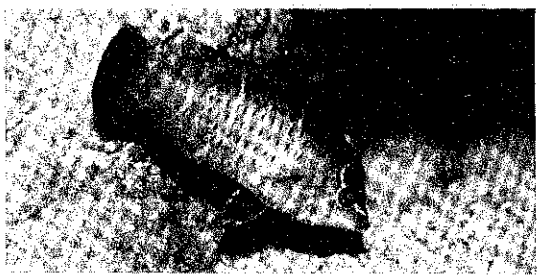
風変わりなベラ　ギチベラ

宇井 晋介

ベラの仲間は色鮮やかな色彩のものが多く水族館でも人気者だが、姿形はどちらかと言えばどれも良く似ており、スマートだが、面白味に欠ける。その中で、一風変わった外見の持ち主がこの「ギチベラ」である。今、展示中のギチベラは、昨年末、近くのイセエビ刺し網に掛かったものである。本来奄美諸島以南の暖かい海を住処とする魚であるが、恐らくはすでに小誌上での珍しい魚の紹介の常套句となってしまった「ここ数年の黒潮の接岸と高水温の影響」で、この串本までやってきたものだろう。

ギチベラはマジックハンドのような伸縮自在の顎と色鮮やかな体色を持つ魚である。独特の顎は、通常は頭の下に折りたたまれており、餌を食べる時素早く前方へ延びて獲物をキャッチする。捕食時に顎が突出する魚は決して少なくないが、ギチベラの折りたたまれた下顎の先端は頭よりも長く、その特異な風貌は、一度見たら決して忘れられないだろう。また、その体色もけばけばしい上に住み場所や環境によって体色を変えると言われ、不気味な白いマスクを被ったような頭と鮮やかなオレンジ色の背、真っ黒の体を持つかと思えば、目の覚めるような黄色一色の個体もある。

現在飼育中の個体は全長７㎝ほどの幼魚で、褐色にわずかに黄色い紋が二つほどあるだけの目立たない色彩であるが、独特の伸縮自在の顎の形状はすでに親と変わらず、水底の餌を器用についばむ様子が見られる。将来、どんなスターになってくれるのか、今から楽しみである。



本州で未記録のキイロハギの採集例

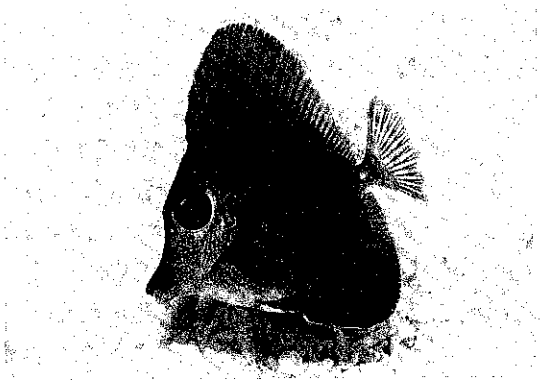
小寺 昌彦

昨年の地先の水温が非常に高かったことは先月号でも報告されている中、キイロハギと思われる魚を採集したので紹介する。

昨年10月に本種の幼魚を地先の水深3.5mのミドリイシ群落で発見したが、枝状ミドリイシの枝間に巧みに隠れるため採集できずにいた。しかし水温が15.2℃と低下した本年1月24日、ほとんど逃げずにいるところを簡単に採集することができた。また、2月5日に採集地付近でほぼ同サイズの個体を見つけたが、当日は水温が16.5℃と前回より高く、一定の距離を置いて逃げられ、近づくことができなかった。

中坊他（1994）によると、キイロハギの幼魚は体色が鮮やかな黄色をしていることで体形の良く似るゴマハギと区別でき、また同じように黄色い体色をもつモンツキハギやクログチニザの幼魚とは背鰭と臀鰭が大きく体高のある独特の体形で区別できるとされる。ただし、過去の当館での飼育例では、幼魚期の色彩には判別しづらいものがままあることが分かっている。

キイロハギの串本での出現は非常に稀で、ほとんど毎日ガイドのために町内各地に潜っている串本ダイビングパークのスタッフでさえ、本個体採集地と同じ錆浦地先の枝状ミドリイシ群落でしか観察していない。平田他（1996）によるとキイロハギの分布は高知県柏島が北限で、本州では未記録と思われるので標本とした。全長41.1mm。



ANTHOZOOLOGIA (73)

八放サンゴ類　その4

ステラケミファ（株）研究部　　岩瀬 文人

前回はウミトサカ目の第3亜目 ウミトサカ亜目の説明で終わった。なお、前回の図1中、「クダサンゴ亜科」及び「ハネコエダ亜科」はそれぞれ「クダサンゴ科」、「ハネコエダ科」の誤りであり、お詫びして訂正する。

さて、今回からウミトサカ亜目の科属の説明に入る。最初は第1科カクレトサカ科。

Family 1. Maasellidae Poche, 1914

カクレトサカ科

群体はポリプの分布しない柄部とポリプが開く冠部に分かれていて、冠部全体が柄部の中に退縮する。柄部の群体壁には多数の骨片が分布し、ゴワゴワした感触になる。骨片は紡錘形や棒形のものが多い。ポリプの触手には左右各1列の羽状突起がある。3属。(Vol. 27, p. 59の図2参照)

本科の著しい特徴は冠部全体が柄部の中に退縮することであるが、この特徴のみに着目すると第2科ウミトサカ科のニンジントサカ属も本科に属することになる。実際Bayer(1981)はニンジントサカ属を本科に含めているが、柄部体壁の構造やポリプの二形現象などの特徴を併せてみればウミトサカ科に属すべきであろう。

Genus 1. *Maasella* Poche, 1914

カクレトサカ属

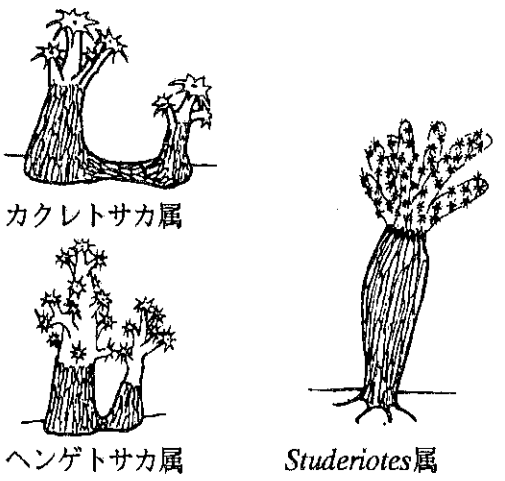
高さ3～10mmの円筒形の柄部の上には数個のポリプが束になってできた冠部があり、このユニットがいくつも走根でつながって群体を形成する。冠部のポリプは単純で、二次ポリプを生じることはない。柄部の表面には長さ3.5mm以下の多数の紡錘形骨片が密に分布しており、この骨片は不規則に曲がったり、時には二叉分岐することもある。共生藻を持つ。*Maasella edwardsi* 1種のみが地中海から知られている。

Genus 2. *Paralcyonium* Milne-Edwards & Haime, 1850　ヘンゲトサカ属

円筒形の柄部の上には樹状の冠部が形成される。冠部のポリプは共肉に埋まっておらず、一次ポリプの体壁から直接二次ポリプが生じ、さらに二次ポリプの体壁から三次のポリプが生じる。このユニットがいくつも走根でつながって群体を形成するが、走根は非常に短い。柄部の表面には長さ3.5mm以下の多数の紡錘形又は棒形の骨片が密に分布しており、この骨片は不規則に曲がったり、時には二叉分岐することもある。共生藻はない。*Paralcyonium spinulosum* 1種が地中海から知られているのみ。

Genus 3. *Studeriotes* Thomson & Simpson,1909

円筒形又は棍棒形の柄部の上に多数の指状又は樹状の突起からなる冠部がある。突起上には密にポリプが分布しており、このポリプは共肉中に埋まっている。走根を出して娘群体を形成することはない。ポリプには支持骨片束がある。柄部の紡錘形骨片は非常に大きいものが多く、種によっては長さ1cmを超えることもある。インド－西太平洋から6種が知られている。我が国からの報告はないが、台湾から報告されている種があり、我が国にも分布している可能性が高い。



カクレトサカ科各属の体制模式図

続いて、ウミトサカ亜目の第2科、ウミトサカ科。

Family 2. Alcyoniidae Lamouroux, 1812

ウミトサカ科

群体形は多肉質の膜状、塊状、指状、叢状、樹状など様々で、ポリプの分布しない柄部とポリプの分布する冠部を形成することが多い。ポリプは単型のことと二型(8本の触手を持つ通常ポリプと触手を持たない管状ポリプ)あることがある。ポリプは厚い共肉の中に退縮し、触手の羽状突起は左右各1列。共肉及びポリプには紡錘形及び棍棒形の骨片が優占して分布することが多いが、時には糸巻形、十字形、多放射形の骨片が分布することもある(Vol. 27, p. 59の図2参照)。

これまでに40以上の属がウミトサカ科として記載されているが、整理すれば実際に本科を構成する属の数はその1/3～1/4程度であると考えられている。本科は未だ整理が進んでいないので正確な属や種の数がはっきりしないが、ここではVerseveldt & Bayer (1988)による16属に基づき、一部私見を加えて14属に分類されるものとして記述する。

Genus 1. *Alcyonium* Linnaeus, 1758

ウミトサカ属

群体基部には明瞭な柄部があり、その上に多葉形、指状突起形、キノコ形、指形、円盤形などきわめて変異に富んだ形の冠部があることが多いが、中には被覆状で明瞭な柄部がなく、膜状から塊状又は球形の冠部がある種もある。ポリプは単型。骨片は紡錘形のものが優占し、糸巻形、棹形、棍棒形、針形などの形も普通にある。これまでに100種程が世界中から記録されているが、実際には半分の50種程度に整理されるものと思われる。我が国からは4種が知られている。

Genus 2. *Acrophytum* Hickson, 1900

群体は指状で分枝しない。柄部の長さは通常全長の半分以下。冠部は円錐形で長く、末端に向かって徐々に細くなる。ポリプは二型ある。骨片は棍棒形又は片側が太い紡錘形で、粗く疣がある。骨片は群体の表面に密に分布し、群体内部にはほとんど分布しない。*Acrophytum claviger* 1種のみからなる属で、南アフリカに産する。

Genus 3. *Anthomastus* Verrill, 1878

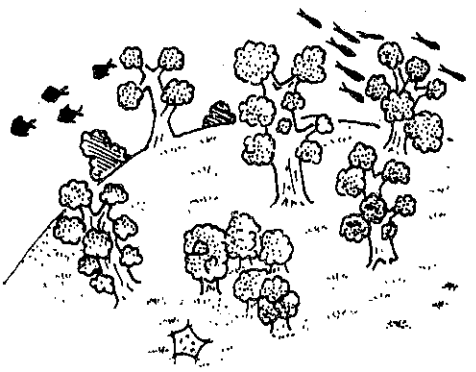
ウミテングタケ属

群体はキノコ形で、円筒形の柄部の上に太くて丸い冠部がある。ポリプは冠部に分布し、二型ある。通常ポリプは大きくて数が少なく、管状ポリプは通常ポリプの間に多数分布する。生殖腺は管状ポリプにのみ発達し、通常ポリプには発達しない。骨片は6～8放射形骨片が優占し、棹形骨片も群体内部にわずかに分布する。色彩は赤いものが多く、稀に白いものもある。9種が知られており、大西洋とインド－太平洋に分布している。多くは深海産で、ウミトサカ亜目中最も多くの深海産の種を含む。我が国からは4種が知られている。

Genus 4. *Bathyalcyon* Versluys, 1906

ヒトツトサカ属

1個の巨大な通常ポリプの花柄部に小さな管状ポリプが無数に分布して群体をなす。生殖腺は管状ポリプにのみ発達し、通常ポリプには発達しない。骨片はウミテングタケ属とよく似ており、ウミテングタケ属の亜属であるという考え方もある。*Bathyalcyon robustus* 1種のみが熱帯西太平洋とメキシコ湾の深い海から知られており、我が国にも産する。

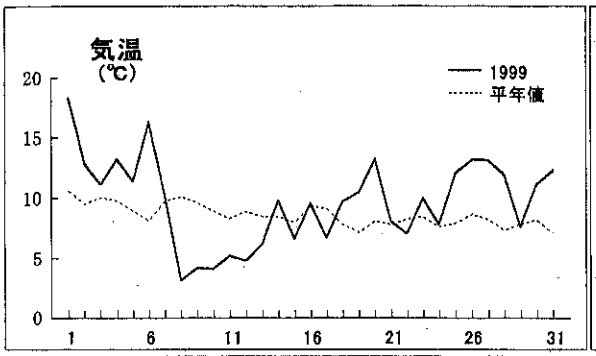


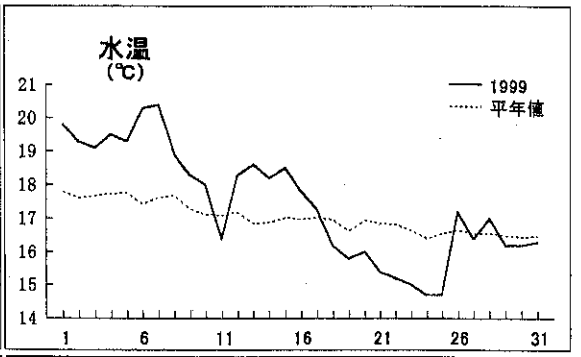
錆浦の海から

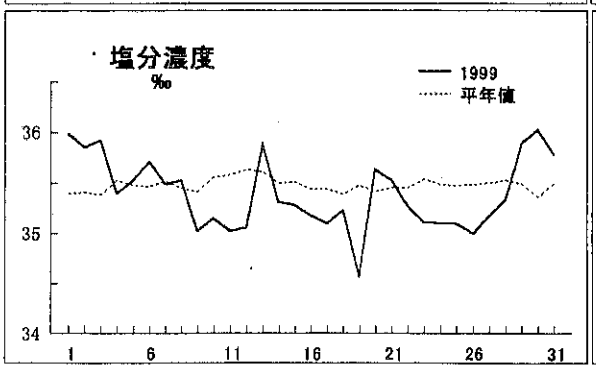
宇井晋介

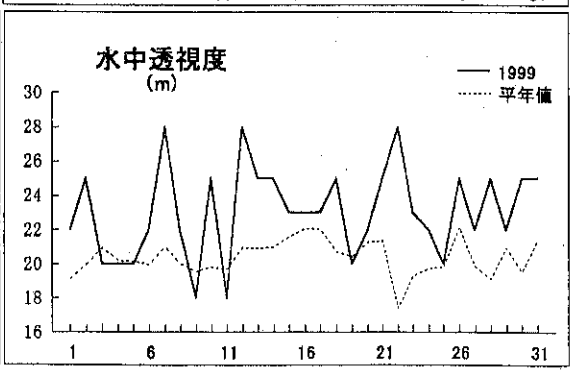
1月平均値	気温　9.7 ℃	水温　17.4 ℃	塩分　35.40 ‰
	透視度 23.1 m	月間降水量　25.8 mm	

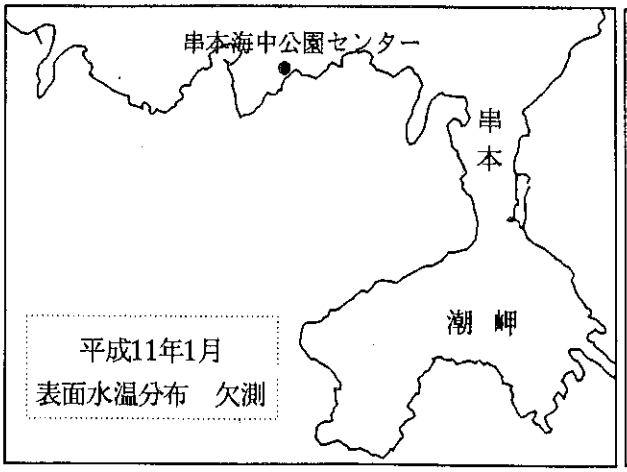
暖かい年の瀬に気を許していたせいか、１月中旬からの冷え込みは応えた。錆浦でも久しぶりに真昼間から雪が積もり、子供たちは寒さを忘れて雪合戦に興じた。串本でも積雪を見ることは年に数回あるが、夜の間に積もるのが普通である。昼の雪はよほど激しくても、落ちる片端から溶けてしまい、雪景色にはならないからだ。ここしばらくの暖かい冬に慣れていた我々はもちろん震え上がったが、それ以上に災難だったのが露地の草花たちである。ハマユウ（ハマオモト）は、青く長い葉をすっかり枯らしてしまった。春から夏に季節が移る頃、日増しに強くなる日差しの下、たくましくすっくと立った長い茎の上に涼しげな白い花が浜風に揺れる。夕暮れにふと立ち止まると、どこからともなく甘い香りがそっと立ち上ってくる。年々減っているとは言え、ハマユウは浜辺の町串本を象徴する花である。今年の夏は、少し寂しい夕暮れを迎える日が多くなりそうだ。











マリンパビリオン Vol. 28, No.2 通巻 326号
1部 50円（年間購読料 1,500円 送料含む）
印刷日　平成 11 年 2 月 20 日
発行日　平成 11 年 2 月 25 日
口座番号：00990-9-41351
口座名称：串本海中公園マリンパビリオン
編集兼発行人
〒649-3514 和歌山県西牟婁郡串本町有田1157
（株）串本海中公園センター
電話　0735（62）4875
FAX　0735（62）7170
印刷所
坂本印刷
串本町串本2481　Tel: 0735（62）0895